気まぐれ天候(仮)

夕日　朝子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
気まぐれ天候（仮）

【Ｎコード】
Ｎ９４３７Ｙ

【作者名】
夕日　朝子

【あらすじ】
私の名前は朝霞梓暮。本日より晴れて並盛中学の１年生。そんな私はただ１つを除けばホント普通の中学生、のはずだったのに……なんでセーラー服着用！？
※思いついた設定をそのまま上げてみた所謂試作品です！続くかどうかは分かりません！

（前書き）

息抜きがてらに考えてたＲＥＢＯＲＮ！で女の子が風紀委員に入ったら、学ランもいいけどそれならセーラーも捨てがたいよねってとこから派生したブツ。思いつきで書いたので続くか分からん…一応設定は練ってみたけれども。
とりあえず一話が書けたから上げてみる。けどあんまり設定が盛り込まれてないや。

連載中の別ジャンルがメインなんでもし好評ならサブってことで連載するかも…
そしたら原作沿いかなぁ。

……うん。分かってたけどさ。
誰だって初見の反応はこうなるよね。

並盛中学1年　朝霞梓暮（あさがすみしぐれ）

只今の場所　並盛中学校校門前
只今の状況　周囲にいる生徒全員からの視線の的

その理由はというと、
只今の服装　セーラー服

並盛中の制服と言えばベージュのブレザーにチェックのズボン又はスカート。風紀委員という恐怖でこの街を支配されておられる方々と言えば学ラン。
そんな中で1人セーラー服を着て堂々と校門をくぐる女子がいれば、そりゃあ誰だって振り返るさぁ。

……どうしてこうなった。私に落ち度なぞ無いはずだ。
投げやりな気分で空を仰いでしまったのは仕方ないことではなかろうか。

ここまで注目を浴びてしまったのならどうせ不審者扱いでもされ直ぐにでも教員がやってくるだろう。その間私がここに来るまでのことを暫し思い返してみようか。

＋＋＋＋＋＋

突然だが私、朝霞梓暮には両親がいない。
数年程前に死別してしまったのだ。祖父母もとうに亡く親類なども
いないた為、引き取り手の無い未成年の私に残された道は孤児院に
行くことだった。
親子3人で仲良く過ごした家には二度と戻って来れないと頭では理
解しつつも当時茫然自失だった私に手向かう術など無く、諦めの境
地に入りかけていたこともあったことから私は周りの判断に身を委
ねることにした。
しかしそんな中、私の幼なじみであり母親同士が仲の良かった家族
が私の後見人に名乗り出てくれたのだ。

その家族の姓は――――――――雲雀。

そして現在私は基本3人で住んでいたあの家で1人暮らしをして、
時々雲雀家にお邪魔する生活を送っている。小学校も先日無事卒業
し今日から晴れて中学生というわけだ。雲雀家の人には感謝しても
しきれない。
ちなみに通っていた小学校は私立の女子校でいきなり環境が変わる
のはよろしくないという理由からそのまま卒業したのだが、私自身
これ以上迷惑をかけたくないと思っていたので中学校は幼なじみの

通う近所の公立中と決めていた。その旨を伝えた時、微妙に嬉しそうだった彼の顔がまだ頭に残っている。今思えばその時に嫌な予感を察すべきだったのか。

「はい、梓暮。」
「ん？恭弥、何コレ？」
「さっき届いた。並中の制服だよ。」

春休み中、一人暮らしの家ですることなど限度がある。その為暇を持て余していた私は近いうち来てねと誘われていた雲雀家に足を運ぶや否や1つ年上の幼なじみから手渡された箱。何かと問えば直ぐに答えは返ってきた。そういえば先日仕立てる為に採寸をしに行ったななどと頭の隅で考えると、目の前にある包装を開けることにした。

だがしかし。

「……どこぞのコスプレですか？」
「コスプレじゃないよ。制服だよ。」
仰る通りで！

確かにこれは、歴とした制服である。並中のものであるかとは別として。反論できないのが口惜しい。

「……並中ってブレザーじゃなかったっけ？」

「一般生徒はね。」

それは私が一般ではないと言っているのか。
現在私が持っているのは何故かセーラー服。ポロリと零してしまった疑問に即座に返答する辺りが腹立たしい。いつものことだがこの喧嘩を売ってるとしか思えない態度に思わず目をじとりとさせると、その視線に気づいたのか彼の幼なじみ様は溜め息をつきながら設定して下さった。

「言ったでしょ。それも（・）並中の制服。ブレザーになったのは最近のことで、むしろそっちが伝統ある（・・・・）並中の制服だよ。」

その言葉に固まってしまった私に代わって箱詰めされた制服をハンガーに掛けてくれる恭弥。私はといえば今の言葉を脳内で反芻していた。

伝統ある制服。一般生徒じゃない。恭弥の嬉しそうな顔。

たっぷりと時間をかけて振り向いた私は、導き出された答えを否定してほしくておそらくこれの犯人であろう目の前の人物にそのまま問いてみることにした。

「……もしかして、いやいやもしかしなくてもこれって風紀委員の制服…？」
「やっと分かったの？ホラ、早くそっちのも出しなよ。」
「いやいやいや！私風紀委員になるなんて一言も言ってないんだけど！？」

え、何、そのならないの？って顔やめてお願いそりゃあ私だって寝

首掻かれない程度には鍛えてるけどそれ以外はホント普通の少女なんだって！！

結局大量の制服を発注しているこの時期に残り数日で制服が仕立てられるはずもなく、私は仕方無くセーラー服で登校する羽目となった。
その後試着した時の雲雀家の皆様の嬉しそうな顔なんて知らないんだから！！

＋＋＋＋＋＋

うん。思い返してみても、私に落ち度は無い。反省すべき点といえば恭弥が嬉しそうな顔をした時に気づけなかったってことぐらいで。だからコレも私のせいじゃないってことで。

「オイ！お前どこの生徒だ！？」
「…ここにいる以上、並中以外に無いと思うのですが。」
「怪しい奴だな！一旦教員室に来い！」

嗚呼、幼なじみ殿。どうせ貴方のことだから私を無理矢理にでも風紀委員に入れるのでしょう。そのことはもう既に諦めました。けれども教員達に説明をしておくなり私に腕章を渡しておくなりなんなりして、こういった事態が起きないよう予め対処はしておいて下さりませんか？

こうして大きな溜め息と共に、風紀委員長補佐・朝霞梓暮の中学生生活は幕を開けた。

（後書き）

如何でしたでしょうか？
お気に召しましたら是非感想をお寄せ下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9437y/

気まぐれ天候(仮)

2011年11月28日04時15分発行